

【佳作】

幸せ運ぶ楽器

田中瑞希（長野県 信州大学教育学部附属長野中学校 1年生）

ある日、唐突にそれは来た。

かれこれ十年も前のことだろうか。私は、何の変哲もない高校生だった。クラリネットケースを肩から提げて校門を出るところで一人の人に会った。その人は、一つの楽器ケースを抱えていた。

「おう、吹奏楽部員。これを君に託す。ただし開けちゃいけないぞ。社会人になって就職したときに職場に持っていけ。いいな。」

男はそうまくしたてると、戸惑う私をよそにケースを置いて行ってしまった。その日以来私はそのケースを鍵つき引き出しにしまつて保管していた。そして、いつしかそんなケースのことなどすっかり忘れていた。そして、そんな出来事があったこともすっかり忘れてしまった。

私は、楽器屋に就職した。小熊楽器店。何で小熊なのか、名付けたはずの店長も分からないらしい。ちなみに店長の名字は、『鹿野』だ。熊と鹿、えらい違いじゃないか。

ある日、店長は、ピアノの調律をしていた私を呼んだ。

「岩崎さん。」

「はい。」

私は答える。緊張で声がうわずわってしまった。

「あの楽器ケースは今どこにありますか。」

「あの楽器ケースとは……何のことですか。」

「あなたが、高校生のときに知らない人から受け取ったものです。」

「あ……。」

その時、店のほうで声がした。

「岩崎さん、お客さんお願いします。」

「あつ、はい。」

そのお客さんは、アルトサクスのリードについての質問がしたかったようだ。一通り説明して、お客さんのものを離れた。これまでの経験上、お客さんのものをいつまでも離れないでいるとよくない。かえって邪魔なこともある。結局そのお客さんはリードを一箱セット買って帰っていった。それよりも店長の言葉だ。なぜ、私が楽器ケースを受け取ったことを知っているのだろう。なぜ、今頃になってその話題を持ち出したのだろう。考えれば、考えるだけ謎が深まって、ピアノの調律も同じ音を何度も調律するだけで、いっこうに仕事が進まなかった。

そして、ランチタイム。先輩の北村さんが一生懸命話をふってくれたが、危うくうわの空になりかけるくらい、私はぼーっとしていた（らしい）。これは後で北村さんに聞いた話だ。私はその時のことをほとんど覚えていない。お弁当の中身やおにぎりの具が2日後のランチタイムに話題になっても、何も思い出せなかったのには、戸惑いを通りこして、衝撃を受けた。

そして次の日。私はあの楽器ケースを取り出した。そういえば、あの時、私にこれを渡した人はどんな顔だっただろうか。必死に記憶の糸をたぐってみたが全然思い出せなかった。あつ、台所で

卵焼きを作っていたんだ。いけない、いけない。見てみたら真っ黒焦げだった。何てことをしてしまったんだろう。朝からこんだ。泣きたい気分だったが一人暮らしの部屋で泣いたってどうにもならない。気を取り直して、焦げた部分をはぎとった。よし、何とかなった。今日も一日、頑張るぞ。

いつも通り出勤、店長にあいさつ。店内を軽く掃除。商品棚を整えて準備完了。あっけない。在庫確認、忘れるところだった。よし、これで本当に準備完了。さあ、開店まで20分。昨日の調律の続きをしよう。いつもと同じく定時に開店。ダックスフントを連れなおじいさんに会う。いつも通りあいさつ。

気づけば時計は11時半をさしている。あと1時間でランチタイムだ。今日は北村さんは家の都合で休みだ。甥の結婚式とか言っていたかな。今日聞いてみようか。店長、昨日の楽器のことですが……と。そうしよう。

ランチタイムになった。思い切って聞いてみよう。

「店長、あの、昨日のことなんですが……」

「ああ、楽器ケースのことかい。」

「はい、今日持ってきています。」

「持ってきているのか。午後に見せてもらおうよ。」

「……はい。」

ここでその話題は終わった。

午後。店長は私を呼び、楽器ケースを持って来るよう言った。そしてケースを持っていくと、無言で向かいの椅子を示し、座るよう伝えた。どうしたのだろう、いつもは、よくしゃべる店長がほとんど話さない。なにかあるサインだ。突然、店長が口を開いた。

「岩崎さん、あの時、ケースを渡した人の顔を覚えてますか。」

「覚えていません。」

「あれは、僕です。」

「えっ……」

「今まで秘密にしていたってすみません。あれは僕なんです。」

「どういうことですか。」

「この楽器ケースを開ければ分かります。さあ、開けてください。」

「はい。」

その中から出てきたのは、総銀製のフルートと一通の手紙だった。これは、一体なに??手紙は、宛て名も差出人の名前もない封筒に入っていた。封を切って貪り読んだ。

拝啓 お元気ですか。あなたの出身高校の吹奏楽部・管弦楽部の中で一番信頼できそうなあなたに相談します。私は楽器店を経営するものです。私はある女に追われています。その女はこのフルートを盗もうとしています。だからあなたに預けます。本当にすみません。もしあなたがどうしても嫌なら信頼できる友人に預け、気が向いたら返してもらってください。 敬具

岩崎様

鹿野

「あつあの店長、その女は今もこのフルートを狙っているのでしょうか。」

「はい。時々、駅のプラットホームで私を狙う女を見かけます。」

岩崎さん、本当にすみません。そのフルートは私が預かります。」

「はい。でも大丈夫ですか。」

「もちろんです。それより岩崎さん。どうかしましたか。」

「あの、あの時、店長は『就職した時に職場に持っていけ』と言

われました。私がここに就職する確率はかなり低いと思いますが……。」

「それがですね。あの後あなたが進学した専門学校では、入学時から、ある程度の就職先が絞られているのです。北村さんもそうでしたよ。つまりあなたの就職先は、ほぼここで決まりだったという事です。」

「そういうことでしたか。」

「はい。顔色が悪いですね。大丈夫ですか。今日はもう店を閉めましょう。」

「はい。」

私は突然押し寄せた情報の波にのまれて頭がくらくらした。

次の日から私は、フルートを追う女がどんな女なのか気になって、気になって仕方がなくて店長が駅まで行くのについていった。そして私は見た。一人の女が、店長をじろじろ眺めていて、その目に怒りがあふれていたことを。その女の顔を忘れることができないほどに強烈な印象だった。それから何事もなく一ヶ月たち、二ヶ月たち、その女のことも忘れかけていたときだった。

ある日、唐突にそれは来た。

その時、私は店の奥にいて、近所の中学校から預かったトランペットの歪みを直していて、レジには北村さんがいた。一人の女性がやって来た。その女性は帽子を目深に被り、マスクをしてほとんど肌が見えないくらいに露出を控えていた。その怪しげな姿に接客を得意とする北村さんも緊張しているのが分かる。私は一目であの女だと分かった。その女は言った。

「フルートの試奏がしたいんですけど……。」

どうしてだろう。あのときの印象とだいぶ違う。あの目とは対照的な声だった。北村さんも驚いているようだ。固くなっている。

「フルートの試奏ですか。ハイ。分かりました。ハイ。岩崎さん、お願いできますか。」

びっくりだ。私は関係ないと思っていたのに……。まさか北村さん、面倒なことを私に押しつけているの？そんな訳ないよね。よしよし。気持ち接客モードに切りかえる。

「ハイ。こんにちは。フルートの試奏ですね。すぐご用意できます。少々お待ちください。」

どの楽器にしようか。ちよっと迷ってから、スタンダードモデル、中級者モデル、プロモデルを手取る。そして、店の表に出る。その女性は、椅子にちょこんと腰かけていて、とても上品である。目の人物と同一人物とはとても思えなかった。

「試奏室か、ここでBGMをきつてもいいんですけど、どちらで試奏されますか。」

「試奏室でお願いします。」

即決だ。早い。その女性と試奏室に向かう。緊張する。何でだろう。店の奥を見ると店長は、あの女性に気づいたらしく、いつになく挙動不審だ。意味もなく歩き回ったり、本棚にぶつかったりしている。大丈夫なのか、この人。一方、北村さんは、何くわぬ顔で、倉庫に行ってしまった。もう、みんなどうして私に面倒なことを押しつけるの、ひどい！その女性は、フルートを一本ずつ試奏していった。ロングトーンと簡単な曲のさわりだけだったが、なかなかの腕前と見える。

「どうでしょうか。まだ他のモデルもありますか。」

「中古は扱っていないんですけど。」

「いえ、中古も扱ってはいますが、数は少ないです。」

「見せていただけますか。」

「はい、分かりました。すぐお持ちします。少々お待ちください。」

一旦、店の奥に戻る。店長に聞いてみよう。あのフルートはどうするのか。あの女性が店長をつけ狙う元凶となったフルート。店長に聞いてみると、案外あっさり、試奏の許可が出た。店長いわく

「それで買ってこれれば、僕も追い回されなくてすむしね。儲かるし、追い回されない、一石二鳥だね。」

らしい。言われてみれば確かにそうだ。その女性のもとへフルートを持っていく。その女性はフルートを見るなり、こう言ってきた。

「できれば一人で試奏がしたいんですけど、いいですか。」

「あっハイ。わかりました。ハイ。」

思わず、ハイを連呼してしまった。そして私は、試奏室を出た。試奏室のドアには小さな穴があつて、そこから中が見える。店員失格だと思いつつも誘惑に負けた私はその穴から中を覗いた。えっ、覗いた先に見えた光景に私は目を疑った。うそ。思わず、自分の頬をつねって、本当かどうか確かめてしまった。痛い。本当だ。見てしまった以上はどうかにかしなければいけない。かと言つて、いきなり室内に入つて何しているんですか。とも聞けない。どうしよう。その時、後ろから誰かに肩をたたかれた。えっ誰。

「岩崎さん。」

「はいっ。」

「私です。北村ですよ。」

「あっ北村さん、すみません。店員失格ですよ。ハイ。すみません。ハイ。これには深い訳があります。ハイ。」

「岩崎さん、勘違いしてない？私は別に怒ったり注意しに来たりした訳じゃないのよ。ただちょっとあのお客さんの動向が気に

なつてね。岩崎さん、店員失格とか言つてたけど私だつて店員失格だし。クビになるなら二人一緒にクビになろう。ね？」

これが先輩店員の言うことだろうか。よし、腹をくくった。私も共犯だ。結局、好奇心が勝つたということか。

「それより岩崎さん、中はどうなっているの？見せてもらえる？」

「はい。どうぞ。びっくりすると思いますよ。絶対。」

「そう？」

案の定、北村さんはびっくりしていた。そりやそうだろう。

「あんなことつてある？フルートの試奏とか言つて、フルートそっちのけでケースを漁っているなんて。」

「はい。私もびっくりしました。仕事上で一番のびっくりです。」

「それは私も。これからどうする？」

結局、二人で話し合つて、北村さんが中に入つてみることになつた。

「すみません。失礼します。どうでしょうか。他の中古もありませんが。」

「はい。ありがとうございます。」

何事もなかったかのように話している。北村さん、さすが接客のプロ。

「それからあそこで覗いている人も中に入れていいですよ。」

「あそこで覗いている人ですか。そんな人いますかねえ？」

北村さんは、あくまでもしらを切るつもりだ。私は見つかりかけているということか。危ない。どうしよう。そうだ。

「すみません。失礼します。担当させていただいていた岩崎です。」

よし、これなら不審じゃないぞ。しかし。

「この人がさっき覗いていた人です。あなたがた二人の会話もすべて聞こえていました。別に怒っている訳じゃないですから。」

「本当にすみません。」

「本当にすみません。」

「そりゃ覗きたくもなりますよね。フルートの試奏をせずに、ケースを漁っているなんて初めてですよ。きつと。そんなことをしている客なんて。」

「まあ、そうですね。ハイ。」

「お二人は秘密を厳守できる方ですか。」

「はい。」

「はい。」

「それでは、お話しします。と言いたいのはやまやまですが、もう時間がなく、またここはいかんせん場所が悪い。私の行きつけの喫茶店があるので今日の夜、来ていただけますか。」

「分かりました。」

「分かりました。」

そうと決まれば、女性の行動は早かった。手帳の切れ端に喫茶店の名前とおおまかな場所を書くと、その場を立ち去った。私と北村さんは、今夜の冒険に好奇心でいっぱいだった。

そして、夜。私と北村さんは、二人で喫茶店に向かった。ここか。『喫茶 月の女神』ござっぱりした外装に、この店のセンスのよさを感じる。店の中に入ると、軽快なジャズが流れていて、心地よい。あの女性は、一番奥のボックス席に座っていた。私たちは、そのボックス席に向かい五分後にはおののドリנקを啜っていた。その女性は『上田』と名乗った。そして語り出した。驚くべき秘密を。

「私は、今、35歳です。かれこれ八年前、私は結婚しました。高校のときの吹奏楽部の同級生で、同じパート、フルートでした。彼はポナーヌを貯めて、買ったとかで、総銀製のフルートを持つ

ていました。それが、今日、試奏させていただいたフルートです。しかし、彼は持病が悪化して六年前に亡くなりました。そのときに、これは後で知ったのですが、あのフルートを売って、生活費の足しにでも思ったようではずかばかりのお金を残してくれました。彼は、フルートを吹くときは、結婚指輪を外して、ケースの中に入れていたんです。そして、ケースの中に入れてそのまま売ってしまったようです。それで指輪が何とかして、取り戻せないか考えました。それで、売った先である『小熊楽器店』に行こうと思っただけです。でもいつも閉店時間に間に合わなくて、それで店

長に頼もうと思っただけですけど、やっぱり勇気が出なくて……。実は店長は私の高校のときの違うクラスだったんですけど、吹奏楽仲間なんです。きつと私のことなんて覚えていないでしょうけど……。本当にすみません。それで、今日、仕事が休みだったので行ってみようと思っただけです。あとは、あなたがたが見た通りです。指輪はありませんでした。」

驚くべき話だ。それから上田さんが、初対面に等しい私たちにこんな大事な話をしてくれたということがまず、びっくりだ。三人とも話に夢中になりすぎて上田さんのメロンソーダはアイスクリームがとけて色が変わっているし、私のアイスミルクティーは氷がとけて水っぽくなっているし、北村さんのホットコーヒーはすっかり冷めてしまっていた。そのときの私たちはそんなことにすら気づいていなかったのであるが……。最初に口を開いたのは北村さんだった。

「でも何で、指輪は消えたんだろう。」

「そうですね。店長に電話してみますか。」

「そうしよう。私がかかるね。」

「お願いします。」

北村さんの電話によると、店長はまだ店にいたので、仕事が終わり次第、こちらに向かうそうだ。それから約一時間後、店長が、喫茶店に現れた。そこで北村さんが上田さんの話を要約し、店長と上田さんが再会を喜び、これからどうするか、話し合った。そして、明日、定休日なので、上田さんと店長が店でフルートをも一度確認することになった。私と北村さんは、それぞれ予定があったので、明日は店長に任せることになった。

ここからは、店長の後日談。結局、指輪は見つからなかったようだ。店中さがしてもなかったというのだから、仕方がない。でも、どこへ行ってしまったんだらう。まあ、いいらしい。それより、何よりびつくりしたのは店長のこの一言。

「それでさあ、僕が結婚指輪を買うことになったんだよね。」

それはつまり？店長と上田さんが結婚するということか。え〜！びつくりだ。何だかよく分からないうちに結婚式の日取りも決まり、私と北村さんも招待された。何だかまだ信じられないなあ。

でも、結婚式に出席して、本当なんだと思った。店長と上田さんはどちらも幸せそうで、ここから新たな生活が始まるんだなと思っただ。そして何より嬉しかったのは、上田さん改め鹿野さんが、『小熊楽器店』で働いてくれることになったことだ。何だか店が今までより明るくなった気がする。

それから、あのフルートは、鹿野さんが買うのかなと思っただけで、そうではなく、リペア室のガラス棚の中に飾られることになった。鹿野さんにとっては、前の旦那さんの思い出の品であり、店長との再会のきっかけとなった宝物なんだろうなと思う。時々、そのフルートの手入れをする鹿野さんを見る。とても幸せそうだ。あのフルートが幸せを運んできたのかな。

それから色々な楽器と関ったけど、こんなに魅力的で、ドラマ

のある楽器はなかった。あの楽器を受け取った高校生のときは迷惑な話だと思っただけど、今となっては、これで良かった。これは私の心境の変化だ。私も少し大人になったのかな。

私も伝えたい。あのフルートに。

ありがとう。これからもみんなを幸せにしてね。